

能登被災地の衛生 危機感

手洗い用の水なく／寒さで換気難しい／トイレは雨水

磐田市立病院 DMAT 医師ら帰任報告

能登半島地震の被災地に本県の災害派遣医療チーム(DMAT)の第1陣として派遣された磐田市立総合病院(同市大久保)の職員が9日、同病院で活動を報告した。現地に入った一谷真一救命救急センター長(40)は、長期化する断水の影響で水の使用が限られている衛生環境に触れ「感染症が流行したら致命的」と危機感をあらわにした。

「感染症流行なら致命的」

同病院DMATは医師や看護師、薬剤師の計4人。発生翌日の2日午後と同病院を出発し、参集拠点の公立能登総合病院(石川県七尾市)に向かった。現地では6日までの4日間活動し、主に食料や毛布、簡易



断水して使えないトイレ。排せつ物を流すため、雨水を集めたバケツが並んでいる＝石川県七尾市の公立能登総合病院(磐田市立総合病院提供)

トイレなどの支援物資輸送の調整に当たった。

公立能登総合病院では貯水槽が破損。断水でトイレも使えず、バケツに雨水を集めて排せつ物を流すための水を確保した。一谷救命救急センター長は「手洗い用の水もなく、ノロウイルスやインフルエンザなどの感染症の拡大が懸念される。避難所では寒さで換気も難しい」と説明。余震で刻々と変化する道路状況にも触れ「陸路での物資搬送が限界と感じた」と話した。報告を受けた磐田市立総合病院の鈴木昌八事業管理者は「4人が無事に帰ってきてうれしく思う。今までの防災訓練を見直し、何が足りないのか、何を準備しなければならないか、何を考えなければいけないかを考えてほしい」と述べた。(磐田支局・崎山美穂)



被災地での活動を報告する一谷救命救急センター長(左から3人目)
― 磐田市大久保の市立総合病院